

「親孝行の季節」

いつもの年より早く咲いた桜も終わってしまったが、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』にならずによかったと思う。春になると、思い出すことがある。

私の母は10年前に、認知症と脳梗塞を合



併して亡くなっている。自宅で療養をしていた時期に、桜が咲き始めたら、近くに桜の名所に連れて行こうと思っていた。しかし、その頃大病院の仕事を忙しく、なかなか家に帰って、車椅子を押して花見の時期に合わせる事ができず、その思いだけで終わってしまった。翌年にはベッドで寝たきりの状態となり、車いすに乗せることができなくなり、花見は無理になってしまった。花見に行かなかった理由はもうひとつあった。医者の方として周囲の人と交流があり、開けっぴろげの性格だった母が、車いすの姿を見せたくないだろうという勝手な思いもあったのだ。

陽だまりの部屋

◆ 当時はまだ認知症のことを周囲に隠す傾向があり、病気であることをさらけ出したくないという家族の思いも強かったのだ。

◆ だが今思うと、そんな状態だからこそ、桜を見せに行けばよかったと思う。家にもりつきりになっていた(そうさせていたのは家族の責任もあるが)母にとつて、外の世界は元気だったころの自分を思い出し、いいチャンスになったはずだ。

◆ 今こそ介護保険制度もあり、外からの助けが認知症をかかえる家族にスムーズに導入されるようになったが、私の母の時代はまだまだ難しい時だった。

先日、長崎にいる家内の両親をハウステンボスに連れていった。両親とも歩くのが大変になってきたので、車いす2台を押しながらの園内見物となった。ちょうどチューリップがたくさん咲いていて、夜は世界で一番数が多いと言われるLED照明が園内をまぶしく飾っていた。月に一回花火を上げる日でもあったので、見学できる席も予約して、真正面で花火を見ることができた。

意外に園内にはでこぼこや、坂道が多く、車いすを押す手は最後の頃には、真っ赤になって痛くなっていました。

そんな時ふと思ったのは、この重さは、親が背負ってきた苦勞の重さなのだ。親孝行をしるとか、親の助けを予防するために、親とコミュニケーションを取りなさいと普段からいろいろなところ

◆ 発言してきた。

◆ 自分の母親にはできなかった親孝行を、家内の両親にはできるだけしていかうと思っている。

◆ 家内の母親からは「他の人のためにずっと生きていて、自分が楽しむという習慣がなかったが、初めて自分のために楽しむという時間が過ごせた」とお礼の手紙が来た。

◆ 一方で、私の友人の母親が認知症を発症したと相談を受けた。友人は、たまにしか親のところに戻らず、こんなに認知症が進んでいたとは思わなかったと言っていた。

◆ 親の健康に気遣うことは、それ自身が親孝行をどうするかということになるし、親が健康でいてくれてこそ、自分も人生を楽しめるということだ。

◆ 車いすの重さくらい、介護の大変さを考えればどうということはない。時間があればではなく、無理をしても自分の時間を割いて親孝行をすべきであろう。春が来て後悔しないために。

● Profile

米山 公啓 (よねやま きみひろ)
米山医院院長・医学博士、作家
聖マリアンナ医科大学卒、同大学第二内科助教授・健康管理部副部長を経て現在に至る。
現役職：日本老年学会評議員、日本脳卒中学会評議員。
著書：「一生太らない食べ方～脳専門医が教える8つの法則」講談社α文庫、「高齢者うつ病～定年後に潜む落とし穴」筑摩書房など、多数。